
気がつけば幽州

burathree

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気がつけば幽州

【Nコード】

N3699V

【作者名】

burathree

【あらすじ】

気がつけば第二の人生が恋姫世界でスタートしてしまった男の話。

更新はとても遅めな予定。

恋姫原作設定と史実の三国志設定、更にはフィクションである三国志演義設定がミックスされることがあります。

序文

冬の寒い日の朝。

息が白く凍るような時間帯。

寝ぼけ眼をこすりながら、当時の俺は会社への道を急いでいた。
完全な寝坊であつた。

何とか就職はできたものの、世は空前の不況である。

小さなミスは遠慮容赦なく査定に響くし、小さくないミスであれば首が飛ぶ。

そんな時代であるからこそ、間抜けにも寝坊してしまった俺は精
いっぱい走っていた。

何とか始業時間前に机に着席できれば。

そんな思いから、がむしやりに走っていた。それこそ周囲には目
もくれないほどに。

——それが悪かつたのだろう。

まさか、水たまりが凍りついた部分を踏みこんでしまうなんて。

全力疾走中だった俺は、まさにマンガのように体勢を崩して転倒
しかけた——が、そこは遅刻がかかった大事な場面である。

何とか空中で体をひねってバランスを取り戻すと、無事に地面に
着地することに成功する。

が、やはり転びかけた勢いを消すことはできなかったため、二度、
三度とたたらを踏んでしまう。

そしてようやく完全に静止出来た時に俺は気がついた。

ぴょんぴょんと転倒しかけた後にたたらを踏んでいる内に、道路
の白線を越えてしまっていたことを。

真横、右の方角からけたたましいクラクションの音が鳴り響く。視線を即座に横に向けると、そこには重量級もかくやというトラックが俺に急接近していた。表情が引きつるとともに、背筋が凍りのように冷たくなる。

——死の予感。

高速で迫りくる超重量に、俺は一瞬、死を覚悟した。だが、諦めるわけにはいかなかった。

バランスは既に取り戻している。

トラックの速度は風のように速かったが、窮地に陥っているためか、俺の思考速度はもっと早く動いた。

世界がゆっくりと遅滞していく。急速に色が失われていくモノクロの世界。迫るトラック、鳴り響くクラクション、そして周囲の視線がこちらに集まっているのを感じた。

直後、頭の中で回答が弾き出される。

通常ならば、このまま黙ってトラックを眺めてお陀仏になるか、もしくは白線の外側、歩道へと戻ろうとすることだろう。

だが、それでは遅い。

俺は流れのまま、車道の内側へと駆け抜けることに決定した。それならば。体を反転させる手間がいらないため、もっとも早く行動できる。

周囲にトラック以外のものがないことは確認済みだった。

全力で大地を蹴る。

——直後、俺の体の後ろを、トラックが通過していった。怒りを表現したいのか、トラックは何度もクラクションを鳴らしていた。

安堵する。どうやら無事に切り抜けることができたらしい。俺は何よりもまず、他の車にひかれる事態を避けるために、周囲を注意しながら歩道へと戻った。

そして、遅刻しかけていたことを思い出して、再び走り出した。朝っぱらから食事もとらずに走り続け、あまつさえ何度も死に瀕したせいか、体が鉛のように重い。

しかしこれも仕事のため。ひいては生きるためなのだ。そう自分に言い聞かせて俺は走った。

そして始業時間10分前。俺は何とか会社の前までたどり着いた。5階建ての築30年以上が経過したビルの3階から上が俺が働いている職場になる。

今日もここで夜遅くまで給料のために働くのだ。と、若干、朝から憂鬱な気分になりながら頭上を見上げていると、不意に視界に黒い影が迫った。

反射的にひょいとサイドステップをして影を避ける。

直後、俺が建っていた場所にぱりんと甲高い音がして、陶器の破片が飛び散った。ちらりと視界の端に移った映像から判断するに、頭上から植木鉢でも落ちて来たらしい。

何てベタな展開だろうか……。

そんなことを衝動的に考えながら、地面に着地する。はず、だった。

ずるりと、かかとが地面をとらえきれずに空転する。

体を支え切ることができずに、俺は見事に倒れ込んだ。朝型の一件とは違い、今度は体勢を整える余裕もない。

何が起きたのか理解できなかったが、体を崩して後頭部から地面へと倒れ込む瞬間、俺は見た。

空に高々と舞い上がる黄色い物体を。

恐らくは地面に落ちていたそれを、無警戒に踏み込んでしまったから、俺は今、こうして転倒しているのだらうと。

腐りかけなのか、よく見れば黄色の中に黒が混ざり始めた憎いや

つは、悠々と空を舞っているように見えた。転ぶ俺の姿を見て勝ち誇るかのように。

（……くそ、まさか、こんなアホみたいな展開だなんて、そんな、そんなバナナ——ッ！）

直後、脳全体を揺らす激しい衝撃が後頭部より突きぬけて、俺の意識は消滅した。

気がつけば幽州 / プロローグ

ふと、懐かしい時代のことを思い出した。

あれはまだ俺の名前が羽田孝春^{はねだたかはる}という名前だった頃の話だ。今の俺の名は田羽孝春。

こう書くとあまり変化がないような気がするが、大いに異なる。

具体的には読みが。

姓は田^{でん}、名は羽^う、字は孝春^{こうしゅん}。

——滑って転んで意識を失い、気がつくと俺は見事に三国志時代の住人となっていた。

冗談のようで、至極真面目な本当の話である。

そして更に付け加えるならば、

「東山様^{とうざん}、どうなされました」

前を歩く栗毛色の髪をした若い女性が、こちらの様子を窺うように振り返る。

彼女の身につけた朱色の軽甲が金属のこすれあう音を鳴らす。

彼女の名前は程普徳謀。ていふとくぼつ

世が世なら、孫呉を代表する宿将だったはずの人物である。

「いや、何でもないよ。海ちゃん。少し昔のことを思い出したただけだから」

さらに付け加えるならば、俺のことを東山という真名で呼んだ彼女の真名は海になる。

そう、——真名である。

通常の三国志時代に真名などというものは存在しなかったはずなのだが、この世界には親しい者同士は真名を呼び合うと言う風潮が強固に根付いていた。

普通は男であるはずの三国志武将が女であり、真名という制度がある。

その時点で、萌系のアニメやゲームに詳しくればぴんと来る人も少なくはないだろう。

結論からいえば、ここは紛れもなく恋姫無双の世界であった。

「そうですか。ならば良いのですが。——では、もう少し速度を上げましょう。日暮までに次の邑に辿りつけなくなるやもしれません」

そう言うのと、彼女——海ちゃんは再び俺の前を歩き始めた。先程よりも少し早い歩調で。

体軸がまったくぶれていない、凜とした海ちゃんの後ろ姿を眺めながら、もう何度目になるかわからない自問を繰り返す。

(……まさか、恋姫の世界に転生しただけでも驚きだったのに、こんな有名武将と共に旅をすることになるなんてなあ)

およそ、生まれ変わったこの世界で俺は特別に才を持って生まれ

るわけもなく、ただのどこにでもいる凡夫として生まれた。

強いて言うならば教育水準の低いこの世界では、前世で大学を出た俺は計算能力やプレゼン能力が他者よりは優れていたぐらいである。それが元で低い身分の生まれでありながらも下級官吏の職にありつくことができたのだが、頭の機転が良くなったとかそういったことは一切ない。

しかしならば、そんな凡夫たる俺がどうして英傑たる海ちゃんと行動を共にすることになったのか。

その理由を海ちゃん風に言うならば天命である、ということらしい。俺は全然信じていないが。

——地獄のような環境の中で、俺と彼女は出会った。

第一話 昔の話

古代中国において天災として恐れられたモノの一つに蝗害が上げられる。

地平全てを埋め尽くす勢いで飛来する蝗の群れは、水稻や畑作物などに限らず、全ての草本類を数時間のうちに軒並み食べ尽くしてしまう。

当然のことながら、食糧を作るところではなくなり、近隣一帯は不毛の大地へと変わる。

これが一度だけでしたらまだ救いはあるのだが、蝗害というものは得てして、数年連続で発生する。大量に発生した蝗が大量の卵を産むためなのだが、これがまた非常に悪辣だ。

情け容赦がないと言い換えてもいい。

一度だけの食糧不足なら普段から食料を蓄えておけば済むのだが、これが何年も続くとなると蓄えるだけでは対処のしようがない。

そのため蝗害が発生すると必ずと言っていいほど飢饉が発生し、餓死者が大量に出る。

そして大量に出た餓死者の存在によって、連続的に疫病が流行することも珍しくなく、——残念なことに、俺が初めて体験した蝗害はそのケースだった。

食糧が無くなり、飢饉が生じ、餓死者が出て、処理されずに放置された死体を原因としてか疫病が流行し、病死者が出る。

言葉だけでは表現しがたいが、その苛酷さは想像を絶する。

特に日本と言うぬるま湯の中で暮らしていた俺にとって、食糧が不足すると言う事態から餓死者が出て、疫病が流行するという流れは、自分の目で見ても信じがたい物だった。

目に映る人々の多くは骨と皮だけの様相を呈し、僅かな食糧を求めて群がり合い、暴徒と化すことも珍しくない。

まさにそこは地獄絵図であった。

そして、そんな中、生まれ故郷の村を離れて出身地である幽州は右北平郡、土垠県の県長府で働いていた俺に一つの訃報が届けられた。

それは母方の祖父が疫病に罹り、明日をも知れぬ状態になっているという連絡であった。

儒教社会において目上の親族は何よりも尊ぶべき存在である。

この世界に生まれ育った以上、その倫理感俺の中にも無論のことで育まれていた。そして母方の祖父は母方の家系の最長老とも言うべき存在であり、血を重んじるこの世界においては大きな存在であった。

祖父危篤の連絡を受けた俺は即座に上司に許可を取り、馬を駆けて生家へと戻ったのだが、すでに祖父は病没していた。

飢饉によって栄養状態の悪化した祖父は、治療の甲斐なく、三日と持たずにその命を散らしたとのことであった。

/

そして実際に俺が生家にたどり着いて間もなく、俺はその子の存在に気がついた。

顔見知りの親類縁者が葬儀の後片付けをしたり、故人の話をしてる中で、ぽつんと小さな子供が立っていた。髪の色は俺の親類に多い栗毛色の背の小さな女の子だ。

年は十に届くか届かないかと言ったところだろうか。

しかしながら、そんな年齢の親戚がいるとはこれまで聞いたことも見たこともなかった。

俺はふと疑問に思い、近くで葬儀の片づけをしている母に尋ねた。

「母さん。あの子は？」

「……ああ、あんたは遅れて帰って来たから知らなかったんだった

ね。程延ちゃん^{ていえん}のことは覚えてる？」

「ああ。亡くなったとは言え、従姉妹だからな」

俺は田羽という名から分かる通り、田^{でん}姓を名乗っているが、これは父方の姓となる。そして母方の姓は程^{てい}であり、程延とは、俺から見て母方の従姉妹であつた。年は俺よりも五つほど上だつた。

俺が二十歳になるかならないかの頃、病没してしまったため、二十五にもなった現在、その顔は輪郭ぐらいしか思い出せなくなってきたが、言葉を交わしたことも少くない。小さくはかなげに笑う姿が印象的な大人しい人だつた。

「その程延ちゃん^{ていえん}なんだけど、実は子供がいたらしいのよ」

「……隠し子^{かくしこ}ってことか？ それがあの子^こだと？」

「そう。どうも程延ちゃん^{ていえん}が亡くなつてから、お父さんが一人で育てていたらしいの」

母は憂鬱そうにそうつぶやいた後、誰からも離れて、ぽつんと立ちすくむ小さな少女を眺めた。そして周りの者に聞こえないように、小さな声で俺に耳打ちする。

「それと言にくいこと^{こと}なんだけど、どうもあの子^こ、不義の子^{ふぎのこ}らしいのよね」

「不義^{ふぎ}と言つと、つまり……」

「不倫^{ふりん}よ」

「……なるほど」

そこで一つ合点^{あて}がいく。あの子^こ供^{ども}が隠し子^{かくしこ}として人目^{ひとめ}につかないように育てられてきた理由だ。

不倫^{ふりん}という^{いう}と日本の社会^{しやかい}ではそこまで珍しい話^わではない。まあ多少^{まうたう}の嫌悪感^{けんあくかん}は持たれるだろうが、その次元^{じげん}に留まる。

しかしながらこの世界は、儒教精神の細部まで根付いた三国志の時代である。正確には未だ後漢なのだろうが、それでも人々の中にある意識は大差ない。

——儒教において守るべきは、五常（仁、義、礼、智、信）と五倫（父子関係、君臣関係、夫婦関係、長幼関係、朋友関係）である。

これらに背くことは基本的に是とされない。端的に言えば、儒教思想の浸透した地方では排他される要因となりうる。

名も知らぬ親族の責任が、一族郎党皆処罰という形で降りかかってくるがありうる世界で、身内が儒教倫理に背いた行動を取ることは唾棄される傾向にあった。

それはもちろん、俺が生まれた村も例外ではない。

「どうりであの子の周りに誰もいないわけだ……」

子供であろうと、その存在自体が不義によるものであるならば、例え幼くとも歓迎されはしないだろう。恐らく、死んだ爺さんが皆の眼から隠して、あの子を育てていたと言つのもそのためだろう。

母方の爺さんは、人の良さそうな、子供に優しくて甘い人だったから、儒教倫理よりも肉親の情を取ったということだろう。

そのこと自体、個人的には悪いと思わないし、周囲の人間のあの子を見る心情も理解できる。

「それで、あの子はこれからどうなるんだ？」

「それで今、揉めていてねえ……。本当なら程家側の誰かが引き取るべきなんだろうけど、あの子の出自を嫌がって、誰も手を上げようとしなのよ。ただでさえ、飢饉のせいで皆、困窮してるっていうのもあるから」

「父さんの、田家側は――。まあ普通に考えたら血の繋がってない子を引き取る余裕はないか」

ただでさえ飢饉により日々を暮らすのに精一杯な今、貧しい村の出身である親類達が、子供一人とは言え、進んで受け入れるとは考えられなかった。

「うちもあんたが賢かったおかげで、仕送りがあるからよその家よりは楽させてもらってるけど、この辺一帯はほら……」
「分かるよ。この辺り一帯は儒教の教えが根深いからなあ」

つまり言ってしまうえば、俺が生まれた村は排他性の強い、どこにもある田舎だった。

例にもれず、あの子を両親が引き取ったとしても、周囲との関係等こじれるのは目に見えていた。俺の生家は金銭的な問題はクリアしていても、あの子を引き取るとなった場合、その問題がのしかかってくるわけだ。

田舎というものは良し悪しがあるが、これはその一例とも言える。

「それに私達は喪に服さないといけないからねえ」

母は、空を眺めながらそう呟いた。

この時代、両親の死とは真に悼むべきものである。日本にいた頃であれば、親に不幸があつた場合は喪休として三日ほどの休みが社会人でも与えられていた。しかし、儒教思想の浸透したこの時代では、スケールが遥かに違っていた。

両親が亡くなった者は、職がある者は職を辞し、半年ほど喪に服するのが通例であり、当然のことであると考えられていたのだ。（

注１）

となると俺の両親はこれから長い間、日々を最低限の仕事だけを

行い、後は故人を悼むためだけの質素な生活を続けなければならぬのだが、そうなると子供の世話をする余裕など無いだろう。それは十分に理解できた。

「程家側は無理。母さん達も無理となると、なかなか難しいな」

俺はゆっくりと空を見上げて呟いた。

この時点で俺は二十五歳であったが、前世の年齢まで加算すると五十を超す。年を取ると往々にして小さな子供には甘くなるもので、儒教的な考えがあるにせよ、それと同時に幼い子供を不憫に思う強い感情もまた胸の内にあった。

「と、なると、だ」

俺は再び視線を正面に向け、所在なさそうに地面に視線を落とす少女を見つめた。

近づいていく。

歩くだけで腹は決まった。

「ちょ、ちょっとどうするつもりだい？」

「周囲の誰も面倒を見れないと言うなら、答えは一つしかないってことだ」

そう答えるだけで母は俺が何をしようとしているのか気づいたらしい。

血のつながりがなせる技で、母は呆れたように声を出した。

「あ、あんたはこれと決めたらいつも勝手に行動してっ！」

わずか数十歩、足を進めるだけでその子の前に来た。

少女は俺の顔を見ようとはしない。

大人の視線が怖いのだろうか。目の前にいるのだから気づかない
と言うことはないはずだが――。

俺はその子の前で膝をつき、しゃがみこんだ。
視線の高さを合わせる。

「はじめまして。俺は田羽。君の血縁になる」

呼びかけると、少女はおずおずと視線を合わせて来た。

「そして、君さえ嫌じゃなければ、これから君の世話をしたいと考
えているがどうする？」

俺はぎこちないながらも少女に笑いかけた。

（注1）

三国志時代において、主に目上の血族が亡くなった時は、三年ほど喪に服するのが通例であると聞いていますが、本作においては親が亡くなった場合のみ半年の喪に服するものと改変しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3699v/>

気がつけば幽州

2011年8月6日18時31分発行